

聖書:士師記14章1～9節

説教:荒くれ者サムソン

はじめに

前は、サムソンの親であるマノア夫婦に主の使いが現れたときの様子を見てきました。マノアは最初、目の前に立っている人物が主の使いであることに気づかないのですが、岩の上に置いた子やぎと穀物のさき物から突然火が燃えだし、その炎の中を主の使いが天に上って行く。これを見てマノア夫婦は地にひれ伏し、あの人は主の使いだったのだと初めて気がつきました。やがて約束どおり男の子が生まれ、サムソンと名づけられます。主の使いは、このサムソンがイスラエルを救い始めると言いました。両親は大切にサムソンを育てたはずですが、手のつけられない息子に育ってしまいます。主は、どうしてこんなサムソンを選ばれたのか。と一緒に考えてまいります。

1 サムソン

1) 優れた信仰者（ヘブル人への手紙11章）

サムソンが素晴らしい信仰者だと思う方はいないでしょう。ところが聖書はこんなふうに評価しているのです。ヘブル人への手紙11章を開くと、旧約聖書に登場する偉大な信仰者として、アブラハム、モーセ、ダビデ、ソロモンと一緒にサムソンの名前が挙げられているのです。どうしてかと驚きます。これからしばらく、サムソンがどれほどの荒くれ者であったのかという話が続きますが、最後のところで大どんでん返しが起きて、そこで初めて種明かしがされる。そのような流れになっています。そのことを頭に入れながら読んでください。

2) ペリシテ人の女を妻に迎えたい

今日の箇所、サムソンは二つの事件を起こします。一つ目。2節。「彼は上って行って、父と母に告げた。『私はティムナで一人の女を見ました。ペリシテ人の娘です。今、彼女を私の妻に迎えてください。』」イスラエル人は、いまペリシテ人から支配されて苦しんでいる状態です。よりによってそのペリシテ人の娘と結婚したいと言います。当然ですが両親は大反対。ところがサムソンは懲りる様子もなく、「彼女を私の妻に迎えてください。彼女が気に入ったのです」と平気で言い張る。サムソンの性格がこれでわかるでしょう。一度言ったら絶対にあとに引かない。親もそれを知っている。なので、結婚には反対だと言ったけれど、サムソンと

一緒にしぶしぶですが結婚相手が住むティムナに行くことになってしまいます。

3) 獅子を倒して蜜を集める

二つ目事件は、その道の途上で起きました。サムソンの目の前に突然若い獅子が一匹現れ襲いかかってきました。6節。「このとき、主の霊が激しく彼の上に下ったので、彼はまるで子やぎを引き裂くように、何も手に持たず獅子を引き裂いた。サムソンは自分がしたことを父にも母にも告げなかった。」熊が出たというニュースを毎日のように聞いていますから、この場面はちょっと身につまざれます。獅子が人を襲うというだけでも大変なことなのですが、人が獅子を子やぎのように引き裂いたと聞いて驚きます。このとき「主の霊が激しく彼の上に下り」とあるので、神の助けによって獅子を退治できたのは確かです。しかし、これは事件の始まりに過ぎません。続きがある。それから何日か経った後のことです。ペリシテ人の娘との結婚の日取りが決まり、ティムナの結婚披露宴会場に向かう途中、獅子を倒した現場に行ってみる。そうするとミイラ化した獅子のからだに蜜蜂の巣を見つけ、サムソンはそれを素手でかき集めて歩きながら食べたというのです。蜜蜂を飼っている人は、蜂に刺されないようにきちんと服装を整えてから作業します。サムソンはそんなことをしないで、素手でやったというのです。それだけでない。獅子のからだに蜜蜂が巣を作るとことはありえないと言われている。こんなふうにサムソンの周りには不思議なことばかり起こる。偶然ではありません。4節真ん中に、「主は、ペリシテ人と事を起こす機会を求めておられた」とあります。すべてが、ペリシテ人との間で争いが起きていくための主のご計画であつたというのです。事実、この蜂蜜のことがペリシテ人との間で大きな争いが起きる元になっていくのです。そのことはまた次回以降で触れることになります。

ところでサムソンは、獅子を引き裂いたときも、獅子のからだから蜜を集めたときも、そのことを一切両親に告げていません。どうしてでしょうか。それで今度は視点を変えて、この二つの事件を両親の側の視点から考えます。

2 両親の戸惑い

1) 息子が無割礼の者と結婚する

もういちど一つ目の事件に戻ります。サムソンがペリシテ人の娘と結婚したいと言いだしたとき、両親は結婚に大反対しました。もちろんそれには聖書的な根拠がありました。申命記7章でモーセは、このように告げていたからです。「(ペリシテ人のような割礼を受けていない異邦の民である)彼らと姻戚関係に入ってはならない。あなたの娘をその息子に嫁がせたり、その娘をあなたの息子の妻としたりしてはならない。」

もちろんサムソンもこのことを知っている。生まれる前から神に献げられたナジル人として定められていました。小さな時から聖書もしっかり学んできました。ところが、自分の気に入った女性を見ると、相手がたとえ異邦人であろうとも、そんなことはおかまいなくただ欲望のままに突っ走る。そんな大人になってしまった。皆さんがサムソンの親であったらどうでしょうか。息子を説得してもまったく言うことを聞きません。力ではとても勝てないので、逆切れされたらこちらのいのちが危ない。結局、親は息子の言いなりになるしかない。そんなふうに悩んでおられる方には、サムソンのことは決して他人事ではないでしょう。

2) ナジル人の誓い

この両親は、かつて神の臨在の前で震えてひれ伏しました。あの日以来、主の使いから言われたことは忘れたことはない。「ぶどう酒は強い酒は飲んでではない。汚れた物は食べてはならない。生まれてきた男の子の頭にかみそりを当ててはならない。その子は体内にいるときから、神に献げられたナジル人である。」サムソンを生むときも育てるときも、ずっとこの戒めを守ってきたし、サムソンにも守りなさいと丁寧に教えてきたつもりでした。ところが大人になると、手のつけられない乱暴者になってしまった。両親は子どもの育て方を間違ったのではと頭を抱えて悩んだのではないか。

サムソンは、獅子を倒したときも、蜂蜜を手で集めたときも、そのことはいっさい両親に告げませんでした。その理由については、わきに置いていました。民数記6章6節によれば、ナジル人の誓いをした者は、死んだものに触れてはならないと定められています。獅子を殺すことも、死んでいる獅子のからだから蜂蜜を取ることもいけない。サムソンはこれを無視しますが、両親はそうはいかない。いままで両親がナジル人の誓いをどんなに大切に守ってきたのかサムソンは見ています。それで知ら

せなかったということです。親を思っただけではありません。都合の悪いことは言わない。隠したままにする。サムソンの罪がここでも明らかです。

3 神の救いの不思議

今日のところを見る限り、主はもっともふさわしくない人物を選んだとしか思えない。私たちはここでつまづきます。ところが、いつも思うことですが、つまづくところに大きな恵みがあるのです。

よく考えてみましょう。皆さんはサムソンをどのように見ていたか。私はこんなひどいことはしない、サムソンよりもまだましだと思っていなかったか。本当にそうなのでしょう。主の目からご覧になったとき、私たちはサムソンとどの程度違うと言えるのでしょうか。「主を信じています」と口で言いながら、心であの人を赦せないままであったり、人を憎む思いの中にとどまっているのなら、律法を破って平気でいるサムソンとなにも変わりません。

こう考える、サムソンは私たちの本当の姿を映し出す鏡のようなものかもしれません。意外に思われるでしょうか。でも、主はこのようなサムソンであつても選ばれたのです。そうすると、これは私たちにとって大きな恵みになります。「サムソンのようになってはいけない」と言うのではなく、「私たちはサムソンのような者である」と告白ができます。主は、どのような者でも主の御用のために用いることができます。荒くれ者サムソンでさえ、彼は優れた信仰者であつたと言われるほどに、造り変えていきます。

これが主の救いの方法です。私たちの目には不思議としか見えません。私たちの理解をはるかに超えておられる。いま私たちは当たり前のようにここに座っていますが、実は不思議としか言いようのない救いの恵みをいただいたから、ここにいることができている。

そのことに改めて感謝したいと思います。